

第1 特集

感染症の illness script と 治療メルクマール

診療の流れのなかで問われるもの

感染症診療は「診断して抗菌薬を選ぶ」だけでは完結しない。臨床現場で本当に問われるのは、治療が始まってからの経過のなかで、いま患者はよい方向に進んでいるのか、どこかでつまずいているのかを目の前の情報から判断し、次の一手につなげる力である。

この意思決定を支えるのが、疾患ごとの illness script である。illness script は、主訴、時間経過、身体所見、検査、画像所見などを「一連の出来事」として整理する枠組みである。診断までの illness script が注目されがちだが、同じくらい重要なのが治療後の illness script である。解熱、疼痛の改善、循環動態の安定、炎症反応や臓器障害指標の改善、画像所見の変化などが、どの順序で、どの程度の時間軸で動くのかを把握しているかどうかで、治療評価の質は大きく変わる。さらに、その回復曲線を日々の臨床に落とし込む概念が「治療のメルクマール(治療反応の指標)」である。メルクマールを明確にもつことで、漫然と「様子を見る」ことを避け、治療が順調か否かを早期に見極められる。順調であれば不要な抗菌薬延長や過剰検査を減らし、順調でなければ合併症やミミッカーなどの“つまずきポイント”を系統的に再評価できる。

本企画では、各感染症について「診断までの illness script」と「治療からの illness script」を対にして提示し、最後に「治療のメルクマール」と「経過不良時の再評価の視点」を整理する。感染症を“診断して終わり”ではなく、“治療経過を読む”ようになる一助になれば幸いである。

編集幹事

天理よろづ相談所病院
総合内科

長野 広之